

止摂開口莊章母系の漢語音を表わす契丹小字について

吉池孝一

一

契丹小字の碑文をみると、「觀察使」や「度使」の「使」は「𐰽」(ʃi or ʃi)や「𐰽谷」ʃiや「𐰽天」ʃiで、「侍中」の「侍」は「𐰽」(ʃi or ʃi)や「𐰽谷」ʃiでしるす。「使」や「侍」は元代の『中原音韻』（1324年序）でふつうʃiと再構成される。伝統的な漢語音韻学の用語でいうと「使」は止摂開口の韻母、莊母系の声母の字。「侍」のほうは止摂開口の韻母、章母系の声母の字。『中原音韻』では止摂開口の莊母系と章母系は合流し「支思韻」を構成し、その韻母は細音iから中舌的な洪音のiとなる。以上『中原音韻』で合流した二者の漢語音を止摂開口莊章母系の漢語音とよぶことにする。

上のわずかな例によるかぎり、契丹小字資料でも『中原音韻』と同様の傾向が認められるようにみえるけれども、実際はどうであろうか。以下十三種の碑文をもちいて調査する。

- ①1053年「耶律宗教墓誌」（劉鳳翥・周洪山・趙傑・朱志民1995,「契丹小字解讀五探」『漢学研究』13-2, pp. 313-347.）
- ②1055年「興宗皇帝哀冊 [手写本のみ存する]」（清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社.）
- ③1057年「蕭令公墓誌」（清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社.）
- ④1076年「仁懿皇后哀冊 [手写本のみ存する]」（清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社.）
- ⑤1092年「耶律迪烈墓誌」（廬迎紅・周峰2000,「契丹小字《耶律迪烈墓志銘》考釈」『民族語文』2000-1.）
- ⑥1101年「道宗皇帝哀冊」（清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社.）
- ⑦1101年「宣懿皇后哀冊」（清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社.）
- ⑧1105年「許王墓誌」（清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社.）
- ⑨1107年「澤州刺史墓誌」（王未想1999,「契丹小字《澤州刺史墓志》殘石考釋」『民族語文』1999-2, pp. 78-81.）
- ⑩1115年「故耶律氏銘石」（清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社.）
- ⑪1134年「経略郎君行記」（清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社.）
- ⑫1150年「蕭仲恭墓誌」（清格爾泰1985,『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社.）
- ⑬1170年「博州防禦使墓誌」（劉鳳翥・周洪山・趙傑・朱志民1995,「契丹小字解讀五探」『漢学研究』13-2, pp. 313-347.）

二

調査の結果は以下のとおり。莊章母系の声母には破擦音と摩擦音があるけれども、解説されているものは摩擦音にかぎられるため、ここではもっぱら摩擦音を問題とする。数字は当該字の出現頻度。

資料	声母	ㄐ	ㄐ谷 ʃi	ㄨㄥ ʃi
①	莊系：	師4 史1 使1		使4
②	莊系：	史1		
③	莊系：	師11史4 使2 事1		
⑤	莊系：	師2 史1 使3 事2		師4 史2 使2
⑧	莊系：	師2 史2 使3 事1		
	章系：	侍1 詩4	侍3	
⑨	莊系：	使3 師1		
⑩	莊系：	師2 使1		師3
⑫	莊系：	師5 史1 事1	使2 事1	
	章系：		侍5	
⑬	莊系：	史1 使1	使2	師1

〈図表1〉

「ㄐ」の使用例の総数は87、そのうち漢語62、未解説25。「ㄐ谷」ʃiの使用例の総数は13、すべて漢語。現在の段階で「ㄐ」を契丹語の表記に使用する例は確認されていない。「ㄐ」は全期にわたり使用され、中舌的母音「谷」iをもちいて二字で表記する「ㄐ谷」ʃiのほうは後半期にあらわれる。その経過をいえば、後半期に漢語音の分析の進展と正書法の改善がみられ中舌的母音iが析出された。この母音に「谷」iを当て二字で表記する「ㄐ谷」ʃiがあらわれ、「ㄐ」と「ㄐ谷」ʃiを併用する状況となったということであろう。もっとも、前舌母音の「ㄨㄥ」を後置した「ㄨㄥㄨㄥ」ʃiも全期にわたり使用される。この「ㄨㄥㄨㄥ」ʃiを使用するという点は、止撰開口精母系と状況を異にする。『KOTONOHA』14号（注1）で述べたように止撰開口精母系の漢語音tsi, tshi, siは、前半期は「ㄨㄥ」で表記される。後半期には中舌的母音「谷」iをもちいて二字で表記する「ㄨㄥ谷」「ㄨㄥ谷」「ㄨㄥ谷」があらわれる。しかしながら、前舌母音の「ㄨㄥ」が併用されることはない。

三

図表1につき注意すべき点が三つある。

一つ目は「事」の発音。邵雍(1011-1077)の著した「皇極経世声音唱和図」では、現代官話にみられる崇母仄声(一般にはtʃ-)と止撰開口崇母(ʃ-)の分化がすでに起こり後者は摩擦音となっていたという(平山久雄1993;p. 74) (注2)。なお「皇極経世声音唱和図」は契丹

文字資料とほぼ同時代の資料、「事」は止摂開口崇母の字。契丹小字資料で、「事」は「師史使」等の字とともに同一の小字で表記される。これより、契丹小字の漢語では、「皇極經世声音唱和図」と同様の分化がすでに起こっており、「事」は摩擦音となっていたことが分かる。

二つ目は止摂開口における莊母系の音と章母系の音の合流の問題。『中原音韻』では止摂開口の章母系は莊母系に合流して「支思韻」を構成しその韻母は中舌的母音の*i*となるけれども、「皇極經世声音唱和図」ではまだこの変化は起こっていないとされる(平山久雄1993;p. 74-75)。ところで、止摂開口莊章母系の漢語音にはその声母が破擦音のものと摩擦音のものがある。『中原音韻』では破擦音と摩擦音の両者がともに「支思韻」を構成し同一韻母となるわけであるが契丹小字資料はどうであろうか。残念ながら破擦音の解説例はいまのところない。摩擦音については図表1のとおり。⑧をみると「**𠵹**」は莊母系と章母系の両者に対応する。「**𠵹谷**」*ʃi*も莊母系と章母系の両者に対応する。「**ㄨㄨ**」*ʃi*は莊母系のみに対応するけれども、もともと章母系が少ないための偶然であるかもしれない。契丹小字の漢語にあっては、すくなくとも止摂開口の「摩擦音」において莊母系と章母系は同音であった可能性が大きい。もっとも、莊母系と章母系との違いを近似した音とみなし同一の契丹小字で表記したとも考えられるので即断はできない。そうではあるのだが、これらの契丹小字資料(1053年より1170年)は『中原音韻』(1324年序)よりも271年から154年さかのぼるわけであり、そのような資料に『中原音韻』と同様の傾向を見てとることができるということは漢語音韻史にとって興味深い。

三つ目は「**ㄨㄨ**」*ʃi*が全期にわたり「**𠵹**」や「**𠵹谷**」*ʃi*と併用されることの意味。「**𠵹**」で表記される止摂莊章母系の漢語は、前半期と後半期をとおして前舌高母音の「**ㄨ**」*i*を後置した「**ㄨㄨ**」*ʃi*でも表記される。後半期になって中舌的母音の「**谷**」*i*をもちい「**𠵹谷**」*ʃi*と表記するようになっても「**ㄨㄨ**」*ʃi*はいぜんとして使用され、⑩のように両者を併用するばあいさえある。一方、『KOTONOHA』14号で述べたように、止摂開口の精母系字の表記にあたって「**ㄨ**」*i*を併用することはない。このような両者の違いをどのように考えるか。『中原音韻』では止摂開口の精・莊・章母系字はともに支思韻*i*にまとめられるけれども、契丹小字の漢語では莊章母系と精母系の母音の間に何らかの違いがあったと考えざるをえない。『中原音韻』で音韻的に/*i*/と意識された音が、契丹小字の漢語を表記する人たちは音声的に異なる音と意識したものか、あるいは実際に*i*と*i*の両者に発音する人たちが混在していたのか、それとも音の事実を反映するのではなく何らかの文字表記上の問題であるのか、さらに具体的なことについては今後の資料の蓄積をまちたい。

四

莊章母系の破擦音をどのように表記したかという事について、残念ながら現在のところ、まとまった数量の解説例がなく確かなことはいえない。もっとも、未解説の「**子ㄨ**」、「**ㄨ**」、「**木ㄨ**」、「**ㄨ**」などのなかに莊章母系の破擦音が含まれている可能性はある。また

0, pp. 49-107.